

ライフスキル教育を主軸とした性の健康教育講演会の伝達状況に関する追跡調査

富岡 美佳¹・梅崎みどり²

Status of Sharing after Attending a Lecture Series on Sexual Health and Life Skill Education: A Follow-up Survey

Mika Tomioka and Midori Umezaki

要旨

本研究は、性の健康教育講演会を受講した小・中学校、高等学校教員が講演内容を自校に持ち帰り伝達を行う方法や回数、学習効果を明らかにする。方法：教育講座（5日間15講座）を受講した小・中学校、高等学校教員61名が講演内容を伝達した15名から伝達を受けた84名の教員の回答を分析した。山陽学園大学・短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した。結果：61名のうち伝達を行ったのは15名（24.5%）であった。15名から伝達を受けた教員は84名であった。84名の内訳は、資料回覧38名（45.2%）、伝達講習会20名（23.8%）、の順に多く、伝達の回数は殆どが1回であった。内容は教育に活かせると回答をし、概ね内容を正確に理解していた。考察：講演会を受講した61名のうち伝達をした者は僅か15名であったが、15名が1～19名までの伝達を行っており、結果的に84名が講演会の内容を知ることができた。伝達を受けた内容は今後の教育に活かせると評価している者が多いことから、受講内容の伝達は有効であることが示唆された。

キーワード：ライフスキル教育 性の健康教育 伝達講習要旨

Abstract

Aim: To clarify elementary and junior/senior high school teachers' methods to share the contents of a lecture series on sexual health education with their co-workers, their frequency of such sharing, and the learning effect of the lectures.

Methods: Sixty-one elementary or junior/senior high school teachers, who had attended a lecture series (15 lectures in 5 days), were examined to analyze responses from their co-workers, with whom they shared the contents of the lectures. The study was approved by the research ethics

1) 姫路大学大学院 看護学研究科

2) 山陽学園大学 看護学部

committee of the study university.

Results: Among the 61 teachers, 15 (24.5%) shared the contents of the lectures with 84 co-workers. The most frequent method for sharing was “circulating the lecture materials” (38; 45.2%), and then “holding a workshop” (20; 23.8%). The frequency of sharing was once in most cases. The co-workers accurately understood most contents of the lectures, answering that these contents would be useful for education.

Conclusions: Among the 61 teachers who had attended the lecture series, only 15 shared the contents of the lectures, but the number of co-workers with whom each of them shared was 1 to 19. Thus, the contents were shared with a total of 84 co-workers, and many of them positively evaluated the shared contents for future education, supporting the effectiveness of sharing lecture contents among teachers.

Key words: life skill education, sexual health education, workshops for sharing

I. はじめに

文部科学省は、2030年には、グローバル化・情報化が進み将来の変化を予測することが困難な時代が到来し、次世代を担う子どもたちが「生きる力」を磨く資質が求められる時代となるとし、教育課程の検討を進めている¹⁾。情報化に伴い、中学生や高校生のみならず、未就学児や小学生も身近にインターネット環境がある²⁾。便利な面もあるが、インターネットを介してのいじめや、不適切な記事や動画の投稿、性に関する被害など多くの問題も生じ、情報リテラシー教育の必要性が求められている。情報が多くある中で、性に関する正しい知識を得ることのできるセクシャルヘルスリテラシーの能力も必要とされている³⁾。性に関する健康教育を行う際には、ライフスキル教育が効果を上げている⁴⁾。WHOにより推奨されているライフスキルは、健康の維持増進「生きる力」を育む重要な能力とされ、青少年の危険行動やいじめなどの予防に効果が示されている⁵⁾。ライフスキル教育を基軸に置き、現代に必要な性に関する

健康教育を多方面から学び、教員が生徒に伝えていくときの基礎的な知識として学習する必要がある。しかしながら、生徒に関わる全ての教師が学外で行われる学習会に参加することは難しい。より情報を正確に学校で伝達する事で生徒への還元ができると推察される。

そこで、本研究は、性の健康教育の講演を企画し講演内容を自校に持ち帰り、受講内容の伝達による学習効果を明らかにする。

II. 方法

1. 用語の操作的定義

本研究では、「伝達講習とは、学校外での研修や勉強会に参加して、学校に学習内容を持ち帰り、知識や技術を伝達する事」、「ライフスキル教育とは、日常生活に生じるさまざまな難題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力」⁶⁾、「性の健康教育とは、性の健康と権利に関する教育」と定義した。

2. 研究対象

A県で開催された教育講座（5日間15講座）を受講した80名のうち小・中学校、高等学校教員61名に対して自記式質問紙調査を郵送法にて行った。61名の教員から伝達を受けた84名の教員から回答を得て分析を行った。

3. 調査期間

2012年7月～2014年1月までに教育講座を実施し、その後伝達状況の確認を行った。

4. 調査内容

調査は、教員の職位、性教育に関する委員会の有無と役割、講演内容の伝達の有無、伝達方法、伝達回数、伝達を受けた教員には、受講後1か月以内に伝達を行ったかを尋ねた。また、伝達を受けた教員にも自記式質問紙調査を実施した。伝達を受けた教員には、伝達を受けた回数と伝達内容の感想、および教育に還元可能かの記述を求めた。

5. データ収集方法

講演を受講した教員には、講演開始前に研究の説明を行い同意が得られた対象者に受講後1週間以内に受講内容の伝達状況に関する調査用紙と、伝達する教員に記入してもらう質問紙を渡した。質問紙に研究の説明と郵送にて回収された場合同意したとみなす旨を記載した。

6. 分析方法

分析には、SPSS22.0 J for Windowsを用いた。

7. 倫理的配慮

山陽学園大学・短期大学研究倫理審査委員会から承認を得て実施した(平24大006)。研究の趣旨、目的、プライバシーの保護、調査への参加は自由意思であることを文書で説明した。調査は無記名とし、回収は個別に郵送で行い、調査用紙の返信をもって本研究に同意を得られたものとした。

Ⅲ. 結果

1. 性に関する健康教育講演会受講教員の基本的属性（表1）

伝達をした受講者の属性は、養護教諭31名（50.8%）、教諭18名（29.5%）、養護助教諭7名（11.5%）、講師2名（3.3%）、無回答3名（5.4%）であった。男性5名（8.2%）、女性54名（88.5%）、無回答2名（3.3%）であり、平均年齢は41.3歳であった。参加者は養護教諭が最も多かった。性教育に関する役割は、保健主事9名（14.8%）、性教育委員である28名（45.9%）、性教育の担当である34名（55.7%）であった。

	項目	人数 (%)
校種別	小学校	16 (26.2)
	中学校	20 (32.8)
	高等学校	22 (36.1)
	特別支援学校	3 (4.9)
性別	男性	5 (8.2)
	女性	54 (88.5)
平均年齢 (±SD)		41.3±1.0
職種別	養護教諭	31 (50.8)
	教諭	18 (29.5)
	養護助教諭	7 (11.5)
	講師	2 (3.3)
	無回答	3 (5.4)
性教育に関する役割	保健主事	9 (14.8)
	性教育委員	28 (45.9)
	性教育の担当	34 (55.7)

2. 性に関する健康教育講演会講演の伝達と伝達方法及び回数（表2）

61名のうち伝達を行ったのは15名（24.5%）であった。15名から伝達を受けた教員は84名であった。伝達を受けた84名の内訳は、資料回覧38名（45.2%）、伝達講習会20名（23.8%）、会議19名（31.1%）、伝達講習会と資料回覧4名（4.8%）、個別1名（1.6%）、その他2名（3.3%）であった。伝達の回数は、伝達講習会では1回20名（100%）、

資料回覧 1 回 36 名 (94.7%) , 伝達講習と資料回覧 1 回 3 名 (75.0%) , 会議 1 回 19 名 (100%) , 個別 1 回 (100%) であった。殆どが 1 回であり, 多くても 2 回であった。

表 2 講演の伝達と伝達方法及び回数

(n=61) 複数回答

	項目	人数 (%)
講演の伝達	行なった	15 (24.5)
	行っていない	46 (75.5)
伝達方法	資料回覧	38 (45.2)
	伝達講習会	20 (23.8)
	会議	19 (31.1)
	伝達講習会と資料回覧	4 (4.8)
	個別	1 (1.6)
	その他	2 (3.3)
伝達方法と回数	資料回覧 1 回	36 (94.7)
	資料回覧 2 回	2 (5.3)
	伝達講習会 1 回	20 (100.0)
	伝達講習会と資料回覧	3 (75.0)
	伝達講習会と資料回覧	1 (25.0)
	会議 1 回	19 (100.0)
	個別 1 回	1 (100.0)

3. 伝達を受けた方法による評価と活用 (表 3)

伝達を受けた方法による評価は, 資料回覧では, 大変良かった 8 名 (40.0%) , 良かった 12 名 (60.0%) , 伝達講習会では, 大変良かった 6 名 (16.0%) 良かった 28 名 (74.0%) , 伝達講習と資料回覧では, 大変良かった 3 名 (75.0%) 良かった 1 名 (25.0%) であった。会議では, 大変良かった 8 名 (42.1%) , 良かった 10 名 (52.6%) 個別では大変良かった 1 名 (100%) であった。伝達を受けた方法のすべてで, あまり良くなかった, 全く良くなかった人はどちらも 0 名 (0%) であった。

伝達を受けた内容の活用については, 資料回覧では, 大変活かせる 8 名 (40.0%) 活かせる 12 名 (60.0%) であった。伝達講習では, 大変活かせる 6 名 (16.0%) , 活かせる 28 名 (74.0%) 伝達講習と資料回覧では大変活かせる 3 名 (75.0%) ,

活かせる 1 名 (25.0%) , 会議では, 大変活かせる 6 名 (31.6%) , 活かせる 7 名 (36.8%) であった。

会議のあまり活かせないと回答した 2 名 (10.5%) の理由は, 直接生徒に関係する話ではない講座であったと記述があった。

表 3 伝達を受けた方法による評価と活用

(n=61) 複数回答

	項目	人数 (%)
資料回覧	大変良かった	8 (40.0)
	良かった	12 (60.0)
	どちらでもない	0 (0.0)
伝達講習会	大変良かった	6 (16.0)
	良かった	28 (74.0)
	どちらでもない	4 (10.0)
伝達講習会と資料回覧	大変良かった	3 (75.0)
	良かった	1 (25.0)
	どちらでもない	0 (0.0)
会議	大変良かった	8 (42.1)
	良かった	10 (52.6)
	どちらでもない	1 (5.3)
	あまり良くなかった	0 (0.0)
個別	大変良かった	1 (100.0)
	大変活かせる	8 (40.0)
	活かせる	12 (60.0)
	どちらでもない	0 (0.0)
伝達講習会	大変活かせる	6 (16.0)
	活かせる	28 (74.0)
	どちらでもない	0 (0.0)
伝達講習会と資料回覧	大変活かせる	3 (75.0)
	活かせる	1 (25.0)
	どちらでもない	0 (0.0)
会議	大変活かせる	6 (31.6)
	活かせる	7 (36.8)
	どちらでもない	4 (21.1)
	あまり活かせない	2 (10.5)
個別	大変活かせる	1 (100.0)

4. 伝達を受けて学べた内容 (表 4)

ライフスキル教育を各会に一講義を設けて, 性に関する健康と権利についての表 4 に示した内容を実践し, 伝達を受けて学べたキーワードを尋ねた。その結果学んだキーワードに講義内容との違いは概ねなかった。

表4 伝達を受けて学べた内容

伝達を受けた講義内容	伝達を受けて学べたこと（キーワード）	頻度
ライフスキル教育	ライフスキル教育の基礎、10のライフスキル、ライフスキル教育指導上の注意点、新しい手法、自尊感情を育てる	14
インターネットの最近の動向	インターネットの動向、SNSの危険性、メディアリテラシー、スマートフォンとの付き合い方、教師が学ぶことの大切さ	11
現代の女の子の身体の成長と発達	思春期の女子の身体の特徴、個人にあった生活指導	7
10代の性の健康を守る	女性のライフスタイル、10代の性、月経困難症、無月経、骨の成長	7
性犯罪被害とは	性被害の現状、被害者の思い	7
学校で健康教育を展開するために	食育の大切さ、ストレス解消法、地域・家庭との連携	6
青年期の発達課題と発達支援	乳幼児期の親子関係の重要性、自己否定しない育て方、発達障害	5
思春期におけるメディアリテラシー	スマートフォンは電子機器のついたPC、メディアによる情報の歪み、思春期の依存症、思春期の子どもへの指導	4
思春期の性別違和感	性同一性障害	4
家庭内に課題をもつ思春期事例への援助	家族のありかた、家族の関係、家族に触れることの難しさ	3
エイズ性感染症の基本知識と予防行動の動向と予防	性感染症の動向と予防、性と生殖に関する健康課題	2

表5 伝達を受けた内容を活用できる時間と方法 (n=61) 複数回答

活用できる時間の項目	人数	(%)
総合的な学習の時間	13	(21.3)
特別活動の時間	12	(19.7)
教科の時間：家庭科（3）、保健（2）、現代文・小論文、社会理科（各1）、教科目の指定なし	11	(18.0)
職場や家庭	8	(74.0)
保健室での指導	4	(13.1)
学校行事	3	(4.9)
生徒とのコミュニケーションの場	2	(3.3)
児童・生徒活動の時間	1	(1.6)
その他	5	(8.2)
活用できる方法の項目	人数	(%)
授業	27	(44.3)
保健指導	22	(36.1)
保護者への啓蒙活動	10	(16.4)
児童・生徒会活動	3	(4.9)
個別指導	2	(3.3)
家庭	1	(1.6)
職場のコミュニケーション	1	(1.6)

5. 伝達を受けた内容の活用できる時間と方法 (表5)

伝達内容の活用できる時間が最も多かった回答は、総合的な学習の時間で、次いで特別活動の時間であった。家庭科や保健などの教科でも活用で

きる内容であることが明らかになった。活用できる方法は、授業、保健指導の順に多かった。活用できる内容や方法では、生徒を対象とするだけでなく、職場や家庭などの項目も見られた。

Ⅳ. 考察

A県で開催された教育講座（5日間15講座）を受講した80名のうち小・中学校，高等学校教員61名に学校での伝達と伝達状況を知る目的で追跡調査を実施した。61名の教員のうち，講演内容を伝達した者は僅か15名（24.5%）であった。しかしながら，15名が1～19名までの伝達を行っており，結果的に84名が講演会の内容を伝達されたこととなった。この結果から，平均1名が5.5名に伝達したこととなった。受講した人数は80名であった。そのうち，医療関係者などを除き，教員61名の伝達状況を追跡して，伝達した人数は多くはなかったものの，学校で伝達された人数は，元の80名の受講人数を上回る数になった。伝達方法は，資料回覧，伝達講習，会議，資料回覧と伝達講習の順で多い結果であった。資料回覧は講演を受講後すぐに行えることから，タイムリーに伝達できる方法として選択されていると推察される。どの方法も1回のみの伝達であった。本調査は，講座終了後1か月以内の伝達状況を調査したため，概ね1か月以内に伝達が行われていたことが明らかとなった。伝達を受けたものは，どの方法でも大変良かった，良かったと答えており，実際に自身が受講していなくても，情報を得る機会となっていた。会議のような短時間の伝達方法においても，94.7%の人が大変良かった，良かったと評価しており，時間的に短い方法でも伝達の意味がある事が示唆された。正確に講義内容の伝達をする事は，難しいことであるが，講義内容の伝達を受けて学んだ内容を調査した結果，講義を行った講師の目的とほとんど同じキーワードが書かれていた。このことから，講義の内容の概要は伝達されていることが推察され，情報の正確さも担保できる事も明らかとなった。活用について

は，性に関する教育内容であるが，ライフスキル教育を主軸としている講習のため総合的な学習の時間や特別活動の時間という回答が多かった。性教育は心の成長を踏まえて教授する必要があるため，保健体育の枠を超えて学習の場を持つことが必要であると示唆された。伝達を受けた内容は今後の教育に活かす事が可能であると評価していると回答している者が多いことから，受講内容の伝達による学習は有効であることが示唆された。今後は受講内容を効果的に伝達が可能となる内容や媒体の提示，伝達の時期の検討を行うことが必要である。

謝辞：本調査にご協力くださいました方々に心より御礼申し上げます。本研究は，科学研究費補助金基盤（C）課題番号23593356（研究代表者：富岡美佳）の助成を受けて行われた。

本論文内容に関連する利益相反は存在しない。

Ⅴ. 文献

- 1) 文部科学省（2015-11）：2030年の社会と子どもたちの未来，http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo/3/siryo/attach/1364310.htm，（参照2019-11-28）
- 2) 総務省（2015-7）：未就学児等のICT利活用に係る保護者の意識に関する調査報告書，http://www.soumu.go.jp/main_content/000368846.pdf，（参照2019-11-28）
- 3) 富岡美佳，江口実希，國方弘子：高校生向けセクシュアルヘルスリテラシー尺度の開発。思春期学，36（3-4），326-334，2019
- 4) 富岡美佳：中学生を対象としたライフスキルトレーニングを用いた性教育プログラムの効

果. 思春期学, 25 (4), 436-444, 2007

5) WHO. Division of Mental Health. Training Workshops for the Development and Implementation of Life Skills Programmes. Part 3 of the Document on Life Skills Education in Schools. 1-11, 1993

6) 川畑徹朗監訳: WHO ライフスキル教育プログラム. 大修館書店, 東京, 1997